

ミステリ読書案内

2019. 12. 7 発行元

第7号 伊藤 剛

結城昌治ベスト表

今回は結城昌治の特集。日本の戦後のミステリ界に一時代を築いた大作家。(と、私は思っている。) 私の一方的な思い入れかもしれないが、傑作・名作が並ぶ彼の『ベスト表』を取り上げてみたいと思う。

私の大好きな日本人作家

結城昌治は、1927年(昭和2年)生まれ。公務員時代に大病を発して退職した後、ミステリと関わるようになった。1996年(平成8年)に亡くなるまでの作品数は90作ぐらいか。

直木賞受賞作の『軍旗はためく下に』の戦争を題材にした小説、それに『志ん生一代』のような評伝やエッセイなどミステリ以外の本も多数あるので、私が読んでいるのはミステリ中心の40冊である。

日本人作家の中では、私が好きな作家のひとりということになる。大学4年生くらいの時は、一番熱心に読んでいた。

日本のハードボイルドの祖

やはり、一番重要なポイントは日本のハードボイルドの祖であるということ。『死者におくる花束はない』や『暗い落日』などの名作を送り出してくれた。私は大学1・2年で、チャンドラー、ハメット、ロス・マクドナルドは読了していたので、

結城の日本発正統派ハードボイルド作品を読めることが嬉しかった。

右の『ベスト表』上位に掲げた『ゴメスの名はゴメス』はスパイもの。『白昼堂々』は、ユーモア・ピカレスクに近い内容。当時HMM(ハヤカワ・ミステリ・マガジン)の編集長だった都筑道夫などの支えも大きかったとのこと。戦後の日本のミステリ界を引っ張ってくれた一人だと思う。

世間的には松本清張などが脚光を浴びて、著書が再刊され、ドラマ化も繰り返行われているが、結城昌治はもっと評価されているいいような気がする。

多くの人に読んでもらいたい

ということで、最近では、図書館に行っても寂しい思いをする。結城昌治の本は開架書棚にほとんど並んでいない。復刻・再刊されることも少ないようだ。本当は、これからの多くの若者にも読んでほしい作家のひとりなのに…。日本ミステリの“古典”になってほしいと望むものである。

《結城昌治ミステリ・ベスト表》

1. 白昼堂々
2. ゴメスの名はゴメス
3. 死者におくる花束はない
4. 暗い落日
5. 魚たちと眠れ
6. 死の報酬
7. 夜の終る時
8. 長い長い眠り
9. ひげのある男たち
10. 罌の中
11. 死者たちの夜(短)
12. 仲のいい死体
13. 犯罪者たちの夜(短)
14. 死者と栄光への挽歌
15. 死体置場は空の下(短)
16. 裏切りの明日
17. 死んだ夜明けに(短)
18. 世界で一番優秀なスパイ
19. 殺意の軌跡(短)
20. 公園には誰もいない
21. 夜の追跡者
22. 結城昌治ショートショート全集
23. 泥棒たちの昼休み(短)
24. 遠い旋律
25. 真夜中の男
26. 夜は死の匂い
27. エリ子十六歳の夏
28. 温情判事(短)
29. 隠花植物
30. 夜の終わり
31. 逆流オフィスラブ殺人事件
32. 花ことばは沈黙
33. 影の殺意(短)

海外ミステリ この1冊・連載3

E・フィルポッツ『赤毛のレドメイン家』

前回の連載2はルルーの『黄色い部屋の謎』。当然、今回は『赤毛のレドメイン家』となる。『黄色い部屋』の方は、世界的な評価が定まっている。『赤毛の…』の方は、どちらかと言えば、日本でだけ評価が高い。それは、江戸川乱歩の推薦が大きく関わっている。後で書く機会があると思うが、戦前・戦後にかけての海外ミステリ作品の日本での受け入れには、乱歩の力が大きく働いている。私が読んだ創元推理文庫版も、表紙内の内容紹介に乱歩の推薦文が載っている。

1922年の作。イーデン・フィルポッツは、イギリスの田園作家であり、戯曲・詩など幅広い活動で知られている。推理小説を書き始めたのは60歳になってからで、同じく創元推理文庫に入っている『闇からの声』などの傑作が残されている。『赤毛のレドメイン家』は、フィルポッツ独特の悪人創造が第一の特徴。犯人のきわだった特異な性格、そして犯罪計画と巧妙なトリックが相まって、読者の目を引きつける。古典的名作として、よく世界ベスト10にも挙げられている。